父の死と夜ノ森

星尾政吉（父）
星尾耕一（長男）
星尾みな子（その妻）
星尾優子（次男の妻）
臼井涼子（長女）
臼井太一（その息子）
臼井麻美（その妻）
臼井健太（息子・５歳）

野田平良（寝たきりの隣人）
野田真澄（その妻）

医者
看護師
火葬場の職員

宇津木勲（殺人者）
秋田はるみ（殺害される女子高生）
山本すみれ（その友人）
前島（宇津木の上司）
轟（宇津木の後輩）

警官１
警官２

１
いわき市 総合病院。３階にあるデイルーム。
長椅子に星尾みな子と、やや離れて宇津木勲が座っている。

耕一がみな子に自販機で買ってきたコーヒーを渡す。
二人、コーヒーを飲む。

やがて、星尾優子が、いくつかの荷物を抱えて、来る。

耕一「あ。優子さん」
優子「お兄さん、お姉さん、遅くなりました」
みな子「びっくりしたでしょ、急に」
優子「ええ。お父さん、どうですか」
耕一「昨日の夜は、危なかったんだけど。今は、持ち直して」
優子「そうですか。よかった」

みな子「洋治さんは」
優子「どうしても、仕事で来られなくて」
耕一「え、そうなの」
優子「はい」

耕一「ま、ちょっと座ったら」
優子「はい」

宇津木、少し、スペースを明け渡すためにずれる。
優子、座る。

みな子「疲れたでしょ」
優子「いいえ」
耕一「座れた？電車」
優子「ええ。お兄さんたちこそ、大変でしたね。昨日の夜、寝てないんじゃないですか」
みな子「大丈夫よ」
優子「急だったんですね」
耕一「うん、お腹痛いっていうから、近くの医者行ったら、ここじゃ無理ですってことで、救急車で」
優子「そうですか」
耕一「一時はどうなるかと思ったんだけど」
みな子「さっき意識も戻って、もういいから、みんな帰れとか言って」
耕一「今は痛み止めの薬で眠っているみたいだけど」
みな子「でも、話しかけるとわかるみたいよ」

優子「じゃ、私、ちょっと、お父さんに」
耕一「あ、いいよ。いま、眠ってるし、姉さんもいるから」
優子「あ、そうですか、涼子姉さんが」

臼井涼子、来る。

涼子「あら優子さん」

優子「はい」
涼子「今、ちょっと意識、あるみたいだから」
耕一「あ、そう」
優子「じゃあ、私」
涼子「うん、お父さん、喜ぶと思う」

優子、病室へ。

涼子「洋治は？」
耕一「仕事だって」
涼子「そう、じゃ、優子さん一人なの」

やがて、臼井太一、麻美、健太が来る。

涼子「あ、太一。麻美さんも」
麻美「お母さん」
太一「どうなの」
涼子「ああ。もう、たぶん、ダメかもね」
太一「ええ。あ、そう」

麻美「この前、健太と電話で喋ったのにね、ひーおじいちゃん」
みな子「健太くん、大きくなったね」

涼子「あ。ここいいですか」

宇津木、荷物を引き寄せる。そのスペースに太一の家族は座る。

耕一「なんか、飲む」
みな子「ジュースでいい？」
太一「すみません」

みな子、階下の自販機の方へ。

麻美「健くん、ほら、おとなしくしてないとね。ゲームする？」
健太「やだ」
太一「……」
健太「やだ」

太一、健太の身体を激しく揺さぶる。

麻美「太一さん」
太一「……病院臭いに決まってるじゃないか！」
涼子「え」
麻美「大きな声、出さないで」

涼子「あらー。健ちゃん病院臭いとか、言ったのね」

優子、戻って来る。

優子「お父さん、眠ってらしたけど、私の声はわかったみたいで」
涼子「そう」

みな子、戻って来て、ジュースを健太に渡す。

みな子「はい」

健太、ジュースを飲む。太一、お礼をいうように促すが、健太は、ジュースをマズそうに飲む。
みな子と優子は立っている。

涼子「優子さん、座って」
優子「いえ、みな子さん座ってください」
みな子「ああ、いやいや」

宇津木、立ち、場所を譲る。

宇津木「どうぞ」
涼子「あら、すいません」

優子とみな子も「すいません」と、その場所に座る。
宇津木はやや離れて、立つ。

やがて、前島と轟が来る。
宇津木が立っているのを見て。

轟「あれ」
前島「席は」

宇津木「……」
前島「何してるの」
宇津木「……」
前島「ばかか」
宇津木「……」

轟の携帯に着信。

轟「はい。……ええ、それが、デイルームに席をとっておく手はずがうまくいきませんで、今、待っていただく席がですね。ええ、そうです、一旦落ち着いてそこから病室まで行くまでのスペースというものを、お約束できない都合もありまして。すみません、はい、はい。失礼いたします」

前島「まったく」
宇津木「……」

轟「病室、どこか聞いて来ます」
前島「うん」

轟、ナースステーションへ。戻って来て、前島に耳打ちして伝える。

前島「あそう」

３人、佇む。

太一「じゃ、ひーおじいちゃんに会いに行こうか」

太一の一家、病室のほうへ。

麻美「習字で入選したの、ひいおじいちゃんに報告しなきゃ」

病室に消える３人。

優子「……あ、空きましたんで、そこ、どうぞ」
前島「あ、いえ」

病室から、大声で。

麻美の声「やめなさい！」

健太を抱え、洗面台に走り込む、太一。

太一「早く洗って。洗えって早く」

麻美も、病室から出て来て。

涼子「どうしたの」
麻美「いえ、ちょっと」
太一「直接、触っちゃいかんだろ」
涼子「え。なんに触ったの」
太一「あ。大丈夫大丈夫」
涼子「そう」

ひと段落して、

涼子「えっと。どうしようか」
耕一「うーん」
みな子「どうしましょうね」
涼子「麻美さんも、健太みてないといけないからね」
麻美「あ、大丈夫ですよ」

耕一「しばらくは、このままの状況が続くようだけどね」
優子「そうですか」
みな子「先生もびっくりなさってた」
涼子「普通、破裂したら、そのままいっちゃうらしいんだけど」
耕一「ここのところにこんな大きな瘤があったんだって」
優子「あらあ」
みな子「お父さん、知らなかったのかしら」
耕一「知っててもいつかは破裂してたんだし、仕方ないよ」
みな子「そうね」

優子「じゃあ、私が、お父さん、看ますんで、お姉さんも、お兄さんも一度戻られたら」
涼子「そう？ 耕一どうする。そうしようか。長引いたらあれだしね。みな子さんも、昨日、寝てないでしょ」
みな子「はあ、いや、大丈夫ですよ」
涼子「そうしましょそうしましょう。優子さん、助かるわ。では、そうしましょう。明日の朝、また来ますんで」

優子「はい」
涼子「さ、あんたたちも、一旦帰って。ね、また来ましょ」

太一の家族も準備する。

耕一「じゃ、優子さん、よろしくお願いします」
優子「はい。わかりました。なにかあったら、連絡しますので」
みな子「ごめんなさい、ほんと」
優子「いいえ」

耕一、みな子、涼子、太一の一家、去る。

優子、残される。

看護師が前島らのところに来て、

看護師「あの、面会、可能となりましたので」

轟「あ、ぼく、ここに残って、社長に現状伝えますんで」
前島「うん」

前島、来訪可能になった病室のほうへ。
なんとなく宇津木も後を追うので、

前島「いいよ、きみは来ないで」

宇津木、仕方なく、轟の近くへ。

轟「宇津木さん。席、取っとくくらいのこと、ちゃんとやってくださいよ」
宇津木「……」

優子も居心地悪い。
やがて、看護師が来て、何かを優子に告げる。

優子「はい」

優子は、政吉の病室に消える。
残された、宇津木と轟。

２
星尾政吉の病室。
政吉は、朝方に、目を覚ました。
傍らには、優子。

看護師が「おはようございます」と来て。寝台周りの機材をチェックする。

看護師「血圧も安定してますね。お疲れでしょう。おやすみになったら」
優子「はい、大丈夫です」

政吉「私はね、ここより共済病院のほうがいいんですよ。共済病院に替えるように先生に伝えてもらえないですか」
看護師「はい。先生に伝えておきますね」
政吉「お母さんもね、共済のほうで亡くなったんですよ」
看護師「そうですか」
政吉「それから、入れ歯が痛いんで、取ってもいいですか」
看護婦「はい、いいですよ」

政吉、入れ歯を取る。
看護師、一礼して去る。
政吉、優子をじっと見て、

政吉「どなたですか」
優子「優子です」
政吉「ああ。優子さん。東京から」
優子「ええ。さっき、来ました」
政吉「もう、いいよ。帰って。私は大丈夫だから」
優子「はい。でも、もう少し、そばにいますから」
政吉「そうかい」

優子「洋治さんは、仕事です」
政吉「うん？」
優子「洋治さんは仕事で来られませんでした。どうしても抜けられない大事な仕事があるらしくて」
政吉「いいよいいよ、帰ってこないで。早く、優子さんも帰りなさい」
優子「ええ」
政吉「私は大丈夫だから」

優子、やがて、泣く。

優子「私、洋治さんと別れることになると思います」
政吉「うん。まあ、それでいいよ。そのほうがいいよ」
優子「すみません」

優子「どうしてこんなことを、いま、言うんでしょう」

政吉「あいつはね、ダメだ。洋治には、なんにもない。空っぽな男だよ。人間であれ、なんであれ、真剣に愛したことがない」

政吉「優子さん、ようやってくれたよ」

優子、泣く。

政吉「おしっこが出るといいんだが」

突然、政吉、激しく痙攣する。

優子「あら。え、え」

優子、看護師に、「あの、すみません。なんか、痙攣を起こしたみたいで」と告げる。

看護師、現れ、容態を見て、

看護師「先生を呼んで来ます」

看護師、去る。政吉、苦しみ激しく痙攣する。医師と看護師、来る。

医師「再度の大動脈瘤破裂です。今は、ショック状態ですね」
優子「はい」
医師「ご家族のかたですか」
優子「ええ」
医師「ほかのご家族のかたは」
優子「今は、交代して私が診ているんですけど」
医師「最後を看取られたいかたがいらっしゃるようでしたら早く来られるよう、伝えたほうがいいですよ」

優子「え。あ、はい。え、じゃあ」
医師「はい。残念ながら。このまま、しばらくすると」

優子、慌てて電話する。

優子「あ、お兄さん、お父さんが、ええ、早く来てください。そうなんです。さっきまでは意識もはっきりしてたんですけど、なんか今、急に。はいはい。先生が、もうもたないだろうって。はい。お願いします」

優子、戻る。

看護師「こちらから、手をとって。声をかけてあげてください」

優子、政吉の手をとる。
政吉の呼吸、途切れつつも、繰り返される。

優子「お父さん。お父さん。お父さん」
医師「声は聞こえていて、脳には、かろうじて届くようですから」
優子「お父さん。お父さん。お父さん。もう少し、頑張って。ね、もう少ししたら、みんな来ますよ。お父さん、頑張って！お父さん！耕一さんも涼子さんも来ますから！ね、それまで頑張ってください。お父さん！お父さん！お父さん！」

優子、呼びかけ続ける。
医師は、看護師に何かひとこと言って、去る。
政吉、激しく苦しむ。

政吉、死ぬ。

３
富岡町の原発作業員のための宿舎。
宇津木の部屋。宇津木が携帯で電話している。

宇津木「あ。宇津木です。体調が悪いので、今日、休みます」

宇津木、タバコを吸い、しばらくして部屋を出て、車に乗っていわき市を目指す。

運転する宇津木。

常磐線の富岡駅。
ホームに立つ、いわき市内の高校に通う秋田はるみ。
電車が来て、通学する学生たちとともに乗り込む。

車両の中で、はるみ、山本すみれに会う。

すみれ「おはよう」
はるみ「おはよう」

いわき市内を運転する宇津木、やがて車を駅前に停める。
宇津木、改札口から出て来る学生たちを見ている。
その学生たちの中にはるみとすみれもいる。
二人は談笑しながら、宇津木の前を通り過ぎる。

昼過ぎ。
高校の教室前。
はるみのところにすみれ来て、

すみれ「次、授業なに」
はるみ「世界史」
すみれ「あ、じゃ行こ」
はるみ「うん」

二人は校門を走り抜ける。

いわき駅前から繁華街への路上。
そのベンチに宇津木が座っている。
その前を通り過ぎる二人。
そして、大型カラオケ店へ。

個室に入り、ソフトドリンクを注文し、リモコンを操作する。
いくつもの歌を歌っていく。

二人、「サイレントマジョリティー」を歌う。

二人、歌い終えた途端、操作盤で次の曲を探す。
しばらくして、

すみれ「あ。もう、こんな時間」

二人、カラオケ店を出て。
いわき駅への路上には、やはり宇津木がいて、二人はその前を通り過ぎる。
いわき駅から常磐線に乗る。
宇津木は、車に乗って、富岡のほうへ。
二人は、富岡町で降りて、駅舎のベンチに座る。
すみれの母が、車で迎えに来ている。

すみれ「あ、お母さん」

すみれ「じゃね」
はるみ「じゃあ」

はるみ、一人になる。

宇津木の車が駅前に来て、宇津木は降りる。
駅舎に入って来て、はるみに。

宇津木「家、どこ」

はるみ、無視して、歩き出す。
宇津木、車で追いかける。

徒歩のはるみと車の宇津木が、並走する。

はるみ、走り出す。宇津木の車もスピードを上げて。
宇津木の車、はるみを撥ねる。

路上に横たわるはるみ。
宇津木、しばらくあたりを見回し、はるみを後部座席に押し込み、急発進して去る。

原発が海辺にある荒涼とした風景。

４
いわき市。病院の霊安室。

政吉の死体が台の上に置いてある。
その周りに親族が立っている。
誰とは特定できないが、いくつかのすすり泣きが聞こえる。

突然、涼子が悲嘆とともに崩れ落ちる。
太一、麻美が抱きかかえる。

耕一「姉さん、大丈夫かな」
みな子「お父さんの最期に間に合わなかったのが、ショックだったのよ」
耕一「朝ごはんを食べてから行こうって言ったのは姉さんだよ」
みな子「だって、血縁が誰もみとらなかったなんてありえないことだもの」

涼子の咽び泣きが続く。
優子は、居心地悪そうに立っている。
優子のスマフォに着信。優子、やや離れて。

優子「……そんなこと言ったって。あなたのお父さんじゃない。少しくらい時間とれないの。……明日がお通夜で明後日がお葬式だって。……え、そんな、私、どうしたらいいのよ。……もう、いい、後でかけるから」

移動のための車が来たと職員が耕一に告げる。
死体とともに親族も移動する。

5
宇津木の部屋。夜。
秋田はるみが横たわっている。

玄関に人が来る。轟。
はるみを残して、玄関先に出る。

轟「こんにちは」
宇津木「……」
轟「調子悪いんですか」
宇津木「……」
轟「今日、会社来なかったから」
宇津木「なに」

轟「中、いいっすか」
宇津木「ここでいいから」
轟「ここじゃ。話しづらいな」
宇津木「……」
轟「中、いいでしょ」
宇津木「ここがいいよ」
轟「……」

轟「結婚しようかと思って」
宇津木「……」

轟「大成電産との定期戦で、宇津木さんのバット折ったの、すんませんでした。あのまんま、知らんぷりでもいいかなって、一時は思ったんすけど、憎まれたら、あれなんで、ミズノのやつ買って返しに来ました」

轟は、新品のバットを宇津木に渡す。
宇津木は、ドアを閉めようかと、

轟「手短に、いいですか、ここで、言うってことで、いいっすか。あのだって、中には入れないってことなんで、ここで言うか、もう、ここじゃ言わないかの二つに一つってことなんで。……そうなってるんで、中がダメってことなら」

轟「いいっすか」
宇津木「……」
轟「宇津木さん、調子悪いんすか」
宇津木「……」
轟「一応、様子見に行けと、社長に言われて、それもあって、来たんですけど、それだけじゃ、ちょっとあれなんで、ちょっとした人生相談ってことで勘弁してください」

轟「じゃ。言います。彼女は、恋人関係と結婚関係との違いをこう説明するんです。急に怪我したり、病気になったりした時に、会いに行けるのは親族だけだって言うんです。面会謝絶でも、奥さんだったら、病室に入れてもらえるって。まあ、ねー。それはそうだなって思って。いつまでもこのままじゃいけないかなーって。これ、彼女が、結婚とか大事な話、切り出す時の手かなって思ったりもしたんすけど。……どうですかね。この考え方、どうですか」
宇津木「ちょっと、今日は、取り込んでるんで」
轟「取り込んでるって、なんですか」
宇津木「ま……調子も良くないかな」
轟「じゃ、調子悪いって、社長に言いましょうか」

宇津木「ああ。明日も休むって伝えてくれるかな」
轟「はい！」

宇津木、ドアを閉める。
轟、その場から去る。

宇津木が部屋に戻ると、はるみは、起き上がっている。
極度に怯えるはるみ。

宇津木「なんか、飲むか」

激しく、首を振る。

宇津木「なんか、食べるか」

激しく、首を振る。

宇津木「なんか、歌えよ」

宇津木「なんでもいいから、歌えよ」

はるみ、首を振る。

宇津木「カラオケとかで歌う歌あるだろ」

はるみ、仕方なく「サイレントマジョリティー」を歌う。

宇津木、さめざめと泣く。

はるみ、次第に恐怖に襲われ、絶叫する。
宇津木、どうすればいいかわからず、バットで殴打する。

はるみ、死ぬ。

宇津木、呆然として、やがて部屋中に灯油をかけて、火をつける。

作業員宿舎が火に包まれる。

見物の人たちは、口々に火事だ、火事だ、放火か、中に人はいないのか、などと話している。
迅速に消火活動をする消防士。

そこには轟もいて、電話している。

轟「あ、社長ですか。ええ。宿舎やばいです。火、半端ないっす」

その中に、宇津木もいる。手は真っ黒な煤だらけ。顔も煤だらけなので、手でそれを確かめようとするが、黒い手ではそれはできない。

その宇津木の様子が気になって見ている女がいる。野田真澄。
宇津木は、真澄の視線が気になり、見つめ返す。真澄、目をそらす。

真澄、見物から離れる。

宇津木はその後を追う。

2 人の警官が職務質問している。
1 人の警官が、真澄を追う宇津木に気づいて、「おい、ちょっと待って」と言う。
宇津木は、逃げる。2 人の警官は追う。
真澄は、それに気づいて、ふりかえる。

真澄、家路を急ぐ。

6
野田平良とその妻、真澄の家。
座敷に平良が寝ている。庭の人の気配に気づいて、そちらのほうに目をやる。
その人影が動いて、近づいて来るので、隠れるように寝床に入る平良。

縁側のほうから、宇津木が顔を出し、

宇津木「すいません、庭の水道、使わせてください」
平良「……」

宇津木、また水道のほうへ。

真澄が帰宅する。

平良「どうだった」
真澄「火事だった。廃炉作業員の宿舎」
平良「……」
真澄「大丈夫、ここからは遠いから」

真澄、庭のほうを見つめ、

真澄「誰」
平良「水道を使わせろって」

宇津木、来て、

宇津木「ちょっと、ここ、いいですか」

宇津木、入って来て、座る。

宇津木「警察に追われているんです」
真澄「あんた、さっきの」
宇津木「宿舎に火つけました」
真澄「どうして、そんなことしたの」

玄関に人が来る。２人の警官。
真澄、応対する。

平良、激しく咳き込む。
宇津木、台所へ行き、水をコップに汲み、平良に渡す。
平良は咳薬を飲む。

警官は去って行く。
真澄は戻る。

真澄「火事の現場では、女の人の遺体が見つかったんですって」
宇津木「……」
平良「なんで、通報しないんだ」
真澄「あんたなの」

真澄「あんたがやったの？」

宇津木、部屋の片隅へ行き、眠る。

平良、また激しく咳き込む。

真澄も寝床につく。

真澄「ね、政吉さんのお葬式、どうするの」
平良「……」
真澄「一応、親戚なんだから」
平良「長いこと座ってなくてはならないので膝がもたない」
真澄「私だけってわけにはいかないんじゃないかな」
平良「小便が近いので、迷惑かける」

真澄「そんなの、通用するかしら」

平良「あいつが先に死んでよかったよ」

真澄「隣でお葬式出すのに、出ないわけにいかないでしょ」

宇津木、起き上がり、平良の枕元に行き、かすかにしかし力強くささやく、

宇津木「おい、出てやれよ。な、出てやれよ」

平良は、耐えられず、両耳を覆う。

駅への道。

朝、すみれが登校する。
警官が二人来る。すみれ、警官に。

すみれ「ええ。その日は、はるみといました。午後から、いわきです。遊んでたっていうか。……はるみになんかあったんですか。……昨日の火事で。え、なんで、はるみが。……最後に別れたのは、駅です。夜の７時くらいでした。でも、まだ、少しは明るかった。虫もいっぱい飛んでたのに」

すみれ「……ええ。特に変わったことはありませんでした」

すみれ、去る。

真澄が洗濯物を干している。
平良は、少し咳き込みつつ、寝ている。

縁側から、宇津木が麦茶を飲みながら真澄を見ている。
やがて、思い立ったように居間のタンスなどを物色する。金目のものは何もない。
その気配に、平良は、おーいおーいと真澄を呼ぶが、真澄には聞こえない。

やがて、物色を諦めて宇津木は、縁側に戻る。
真澄も庭の洗濯干しから戻る。

真澄「おはよう」
宇津木「……」

宇津木、会釈する。

真澄、朝食の用意をする。
宇津木も座る。

真澄、平良用の朝食を盆に載せ、平良の寝床に持って行く。
平良、食べる。

宇津木と真澄の二人、朝食を食べる。
平良が、味噌汁をこぼす。

平良「おーい」

真澄、それを拭く。その布巾を台所で洗う。
真澄、食卓に戻り、

真澄「ね、お葬式は無理でも、火葬場には来たら」

真澄「あそこなら、座ってなくてもいいと思うよ」
平良「飯が硬いぞ」

真澄「ね、そうしたら」
平良「行かない、行くわけないだろ」

平良、痰がからむ。

7
火葬場。
焼却炉の前には棺桶。その周りに親族と参列者が集う。

火葬場の職員「それでは、お別れのときでございます」

人々、棺桶の窓に向かって、手を合わせる。

職員「みなさま、お別れはおすみでしょうか。よろしいでしょうか。」

職員、窓を閉めようとする。
涼子が嗚咽する。

太一「あ、ちょっと待ってください」

涼子が、棺桶に駆け寄る。最後の見納め。
数人の親族が近寄る。
太一が涼子を支える。
最後の別れを告げ、やがて、もとの輪に戻る。
職員、一礼して、慎重に窓の蓋を閉める。
棺桶の乗るストレッチャーを焼却炉前へと移動する。
操作盤のスイッチを押すと、棺桶が焼却炉の中へ入って行く。
棺桶が、所定の位置に収まると、職員は深く一礼する。そして、参列者のほうへまた一礼し、

職員「それでは、お別れでございます。お見送りをお願いいたします。どうぞみなさま、お近くでお見送りいただいてもかまいませんので。おそばへどうぞ。……前へ」

参列者、焼却炉へじわじわとちかづく。

涼子「お父さん！」

涼子が泣き崩れるのを、太一が支える。
手を合わせる参列者たちの鼻をすする音が多数になる。

職員「火葬時間は、１時間と、少し、かかるかと思います。それまで、待合室でお待ちください」

参列者たち、移動する。

職員「どうぞ。待合室はこちらでございます。どうぞ。どうぞ」

待合室。
親族や参列者が語り合っている。
近隣の人々が給仕をする中に、真澄の姿もある。
耕一とみな子の前に来て、

真澄「みな子さん、すみません、うちの人、とうとう来れなくて」
みな子「いいえ。……膝がお悪いんでしょ」

真澄、とにかく恐縮している。

涼子は、優子の前に来て、

涼子「ね、洋治はなにしてるの。親の葬式に来ないってどういうこと」
優子「……」
涼子「連絡したの」
優子「しました」
涼子「じゃなんで来ないの！」

耕一が来て、涼子を宥める。

職員が来て、深々と礼をする。

職員「みなさま、収骨の準備ができましたので、こちらへどうぞ」

親族と参列者、職員の示すほうへ。

収骨室。
台上の灰骨。その周りを参列者が囲む。

職員「では、よろしいでしょうか。ええ、みなさま、大変おつかれさまでした。これより、収骨の説明をさせていただきます。足元を奥にして、出させていただいております。こちらが頭です。身体の中心にある背骨をまっすぐとさかのぼりますと、こちら、頭の付け根のところに、喉仏というお骨がございますが、私が確認して、こちらに出させていただいております。こう、一般的にですね、仏様が座って手を合

わせていらっしゃるように見えると言われているお骨でございます、お綺麗に残っていらっしゃいますんで、仏様が、手を合わせているように見えますね。後ほど、喪主様がお納めしていただくとよろしいかと思います。収骨につきましては、宗教上の理由ですとか、あと、このお骨は一番最初に収めたいとか、そういうご要望等ございましたら、お手伝いができますから、なにかございますか。……」
耕一「……いや、特には」
職員「特にないようでしたら、当葬儀場では、足元のほうから、こうお顔に向かって、壺の中でだんだんと人の形を作っていくようにお納めいただいております。こちら、壺はですね、お名前があるほうを前にさせていただいております。お骨は全ては収まりませんので、全身を均等にバランスよく、お納めください。……箸渡しなどはなさいますか。……こう、お骨を箸から箸へ渡してから、お納めする方法ですね。……最初何回かでよろしいかと思いますので、なさってください。では、足元のほうから、喪主様、近いご家族のかたから、どうぞ」

参列者たち、骨を箸でつかんで、骨壷に入れていく。
いつの間にか、その中に、宇津木に身体を支えられて、立っている平良もいる。

平良、震える手で、箸を取り、骨を壺に入れる。それを補助する宇津木。

参列者たち、野田の平良が来たぞ、傍にいるあいつ、あの人、誰？と、囁き合う。

やがて、葬儀の参列者は散会する。

野田家への道。
平良を支えながら歩く真澄。その後をやや離れて歩く、宇津木。
平良が疲れて、路上に座り込む。真澄、その姿を見下ろす。

真澄「軒下にできる雨粒の形。それが私の人生。同じ形をつくって何度も何度も、下に落ちる。雨のあいだ中、同じことの繰り返し」

３人は、路上で行き場を失うが、宇津木が促し、家を目指す。

８
フタバ次世代エネルギー興業の事務所。
宇津木の勤めている会社。前島と轟。

轟「宇津木さん、今日も休んでますね」
前島「社長、さっきも電話したみたいだけど」

轟「今度のことって、きっと、宇津木さんがやったんですよね」
前島「社長のところにも警察来たって」

轟「おれ、マスコミとかに、なんか聞かれたら、なんて言おうかな」

轟「前島さん、なに言います」
前島「……うん？なに。なんか言った？」
轟「おれは、いい人だったって言いますよ。だって、いい人でしたから。……無口で普通の人だったって」

いわき市。駅前。学校付近。
マスコミの取材を受ける、すみれ。

すみれ「……こんなこと言っても、取り上げてくれないかもしれないけど、はるみがこの世界からいなくなってよかったなって思います。はるみはいつも、どうやったら早く〈ここといまのこと〉が終わるのかばかりを考えていたから。……〈ここといまのこと〉って、はるみと私の特別な言い方で、基本的には学校や友だちや進路のことや親のことで、それを煩わしいとか思っているわけじゃなくて、これからきちんとこなしていく自信はあるにはあるけど、あっという間にそれが終わったら、それはそれで楽だろうなって。今日は、〈ここといまのこと〉がうざかったねとか、〈ここといまのこと〉、今日、ほんとやばかったねとか、私たちはよく言ってました。……それに、あのとき、声をかけられたのがはるみじゃなかったら、私だったと思います。そうなっていたら、いまここでみなさんの前にいるのは私ではなくはるみです。そのとき、はるみも同じことを言うだろうし、死んだ私もいま私が言うようなことをはるみが言うのを望んだと思います。だから、みなさんの期待に答えるようなことは言えません。言いたくないし、それを言ったらますます、はるみが死んだことの意味に反します。……私は、起こってしまったことはもうどうしようもないことなので、この結果を受け止めて、この先なにが私たちのためになるかを真剣に考えたいんです。はるみという名前の一人の人間が死んだことなんて、なるべく早く忘れたほうがいいんです」

富岡町にある大型商業施設の ATM 付近。
宇津木と真澄。二人は、ATM と大通りを隔てて立っている。
宇津木、真澄の背中を乱暴に押す。

真澄は、車両を確認しつつ、道を渡る。

真澄、ATM からお金をおろす。
巡回するパトカーが来て、商業施設に入って行く。
警官二人が降りて、買い物をする。
宇津木は、咄嗟に身を隠す。

真澄は、車両を確認しつつ、道を渡り戻ってくる。
真澄は、宇津木に現金を渡す。

宇津木「これだけか」

真澄、頷く。

宇津木「これだけのはずないだろ」
真澄「一緒に行って確認してもいいけど」

宇津木、歩き出す。

真澄「どこ行くの」
宇津木「家に戻ろう」
真澄「もう、かんべんしてよ」

宇津木、立ち止まるが、また、歩き出す。真澄、仕方なくついてゆく。

日差しの強い、なにもない荒涼とした道が続く。
真澄、めまいがして、しゃがみ込む。

宇津木、真澄のところへ行き、あたりを見回し、自販機を見つけ、自販機で水のペットボトルを買い、真澄に渡す。真澄、水を飲み、二人は再び歩き出す。

野田家。
平良は相変わらず、寝ている。
人の気配がして、

平良「おい。おい。おい！」

宇津木と真澄、玄関から入ってくる。

真澄「お願いだから」

宇津木、台所へ行き、包丁を持ってくる。

宇津木「早くしろ」

真澄、家中の金目の物を探す。

平良「おい。おい。おい！」

真澄、集めた現金、通帳、貴金属などを、宇津木に渡す。
宇津木はそれらをポケットにねじ込む。

平良、恐怖のあまり唸り声を上げる。
宇津木、平良を包丁で殺す。
続いて、真澄も殺す。

宇津木、庭の水道で付着した血を洗う。

宿舎の焼け跡。
その駐車場。そこに停めてある宇津木の自家用車を警官が取り囲み、調べている。
物影からその様子を見ている、宇津木。
諦めて、逃走する。

９
夜ノ森駅。
荷物を持った優子が歩いて来る。
ホームのベンチに座り、タバコを吸う。

やがて、宇津木も来る。

二人、なんとなく、会釈する。

宇津木「ここ、電車来ませんよ」
優子「ええ」
宇津木「……２年後に、浪江とつながるみたいだけど」
優子「そうですか」

宇津木「……オリンピックに合わせたのかな」

優子、宇津木を見て、

優子「あ。昨日、火葬場で。……父のお葬式だったんですけど。父と言っても、義理の父ですけど。夫の

ほうの。いらしてましたよね」
宇津木「ええ、まあ」

優子「それに、病院でも会いましたよ」
宇津木「病院ですか」
優子「ええ。いわきの総合病院。父はそこでなくなったんです」
宇津木「ああ。……三日くらい前ですよね。うちの社長の知り合いが危篤になって」
優子「そうですか。どっかでお会いしてるんじゃないかなって」
宇津木「ええ」
優子「へー」

宇津木「じゃ、お弔いも終わって、帰るんですか」
優子「ええ」
宇津木「どちらですか、お住いは」
優子「東京です」
宇津木「そうですか」

優子「……主人は、仕事があって、来なかったんです」

優子「まさか、本当に来ないなんて思わなかった」

優子「なんか、私、居心地悪くて。……これでやっと、解放されました」

優子、一人で笑う。
宇津木、優子を見る。

優子「すみません。なんでもないです」

宇津木「でも、ここにいたら、いつまでたってもここからは出ていけませんよ」
優子「ええ、わかってます」

優子「じゃあ、２年間、待ちましょうか」

二人で、笑う。

優子「……ここ、夜ノ森っていうでしょ。なんか、昔から気になってて。夜の森ってどんなとこかなって思って。名前に魅かれて……昼間だけど、来てみました。……桜が綺麗なんですよね、並木道の」
宇津木「そうですね」

優子「桜の時期に、見てみたかったな」

優子「もう、来ることもないと思います」
宇津木「あ、そうですか」

優子「これで最後の夜の森」

宇津木「……そうか、お父さんが亡くなられたから」
優子「ああ。……それもあるけど、それだけじゃないと思います」

優子「人が死んでゆくのを初めて見ました。……こうして、私、一人で、手をしっかり握って。呼びかけるんです。お父さん、お父さん、お父さん。考えてみれば、自分の父親でもないのに。すると、ちょっとだけ、返事があるんです。かすかに伝わる感触で、お父さんは答えるんです。ありがとうございましたって。……私にはわかりました。まるで小さな脈拍みたいに。……それは、声になって聞こえたんじゃないけれど、私には、そう、聞こえたんです」

優子「それから、こんなこと言うのはおかしなことだけど。それに、こんなことは誰にも言えないけれど、だって、私には子供がいないから、……だから、そんなことはわからないはずなんだけど、あのとき、お父さんは、私の子供でした」

あたりがざわめく。

宇津木、鼻歌を歌う。

優子「何という歌ですか」
宇津木「知りません。でも……知り合いが教えてくれました」

宇津木、何かに気づいて、駅の外を見つめる。

外には無数の警察車両と無数の警官たち。

宇津木、カバンから包丁を取り出し、優子の首筋に突きつける。
息をのみ怯える優子。
宇津木は、優子を人質にして、夜ノ森の駅舎を出る。

無数の警官たちが後退りする。

道ができる。

そこを宇津木と優子が歩いてゆく。